

ライブラリー 通信

LIBRARY NEWS

TOHOKU UNIVERSITY OF ART & DESIGN
LIBRARY NEWS

発行:東北芸術工科大学図書館

tel. 023-627-2044

fax 023-627-2085

mail : library@aga.tuad.ac.jp

平成20年 4月6日 No.24

2008. spring

[ぽかぽか桜花号]

回想

「デッサン」の「アイデア」基礎とは何？

美術科 教授 若月 公平

一九七七年、三十一年前の春、私は東京都内、私立美大の油絵学科に三浪し入学した。当時の日本は、故田中角栄首相が自らの汚職事件で前年に逮捕され、現在の福田首相の父、故福田赳夫氏が総理大臣になった年で、翌々年には第二次オイルショックで今のような石油高騰が始まる時期だった。美術の分野では、コンセプトアート（概念が主体のいわゆる一般的には難解なモノと言われる作品）の潮流の中だった。私は世の中の出来事など横目に、油絵画家の麻生三郎先生にどうしても教わりたくてその美大に入学した。

授業は明けても暮れてもデッサンだった。石膏像、人体（人物ではない）、静物の木炭デッサンと油絵だった。何十枚も描いた。麻生先生の指導は「対象をよく見（視）なさい」「重量感がない」「空間感がない」などばかり。ここをこうした方が良いとか表現とは何かなどというお話はなかった。まずまず上手く描けた作品でも、褒めてもらえない。人体彫塑のときなどは「足のつま先の動きはどこへ行きどこにつながるか分かりますか？」という質問。「え……？」私が返答につまづいてると、「日本の裏、ブラジルかな？」を回って地球を一周して、かかると戻って来るのです。「禅問答だった。解らなかつた（今なら解るような気がするのだけど）。先生の作品を観ても、暗い画面に絵の具がごてごてと塗られ何やら人体らしき物体が三、四体見え隠れするだけこれも解らなかつた。美術の動きには横目でいられない。世の中の美術は難解なコンセプトアート。「美術手帳」を読んでもチンプンカンプンで解らなかつた。

答えられない禅問答とデッサンは続いた。絵の基礎だからしようがないと思った。ある時、何回も消しては描いた薄汚れたデッサンを褒められた。プロポーシオンも構図もガタガタ、アウトラインは形からはみ出している。「このデッサン、いいですね。存在感がありませんね」と。今度はなぜ褒められたのか解らなかつた。描いていたときの納得のいかない不満足の実感だけが残っていた。



何に納得がいかなくつたのか、今になって気付く。視る対象、人体は正面とわずかな側面しか見えない。しかし、背後に周れば背中や尻が見える。ピカソのように正面、側面、背面を一度に描けば良いのか。そうではない。生身の人体だから動く。形を修正し輪郭線が背景に出たり、背景からは線や調子が人体の形に入ってくる。消してまた描く。見える部分も見えない部分も感じ、三十人居るアトリエの空間、大学のキャンパス、東京、日本、地球の上に私も含めここに在るもの全て、その実感が表せない。納得がいかず描いては消す。そして、褒めてくださった理由が近年やっと解るようになって来た。人体などの「存在」自体を本来、紙の上に視覚的に表わせるものではなかつたのだ。デッサンをする意味は、見えるものを描こうとしても、感じたことを効率良く再現しても駄目。描くべき対象

の存在を覚悟しながらも紙の上に表わせないもどかしさ、肯定と否定を繰り返す、その苦悩する自身の存在を紙の上で確認することだったのだ。人体の形をデッサンで上手く描くのではなく、作者が人体のデッサンを紙の上でした「苦悩」、作者がそこにいた「証拠」そのものがそこにある。その存在がデッサンだったのだ。目に見えるもの、表れるものだけでなく、その中に潜む本来そのものの存在のありようを哲学では「アイデア」と呼ぶそうだ。「デッサンのアイデア」を解らぬまま卒業制作まで年月が経ち最後の講評会、先生の言葉が心に残る。「この作品、あなたは画面と対決していませんね」の一言だった。今なら良く解る。作者である私が画面に居なかつたのだ。デッサンは美術の基礎と言われるが、それは技術的な積み上げ練習だけではなく、作者が作品と対峙し本当に何がしたいのか自問自答すること。創作の苦悩を実感し、自身の奥底を厳しく見つめ分析する精神を鍛える勉強、「デッサンのアイデア」を知ることである思う。麻生先生に教わったことは、卒業当初、現代美術の時流にすぐに乗る即応力は無かつた。でも、私は今でも何とか生きて作品制作をしている。それは、時代性を越えた「デッサンのアイデア」、生きていくことを実感する精神力がデッサンで培われたからだと感謝している。美術には他者に与えてもらう正解はありません。他者に与える正解もありません。自分で問題提起し、自身で考え、自ら行動を起さないう限り何らかの解答は得られないのです。デッサンに限らず美術の勉強には「デッサンのアイデア」を知ること教科書に教わることに以上、生きることの精神力を養う強いはたらきがあると思います。今の時代だから当然コンピューターが使えコミュニケーション能力や英語力など社会への即応能力が必要ですからたくさん本を読み知識を得て考える能力も必要です。そして、人生の大海、大空では「デッサンのアイデア」が美術の基礎を越え、生きる本来の基礎となるのだと思います。

新着図書から

「デザイン哲学叢書

デザインの知」vol.2

●東北芸術工科大学デザイン哲学研究所編
角川学芸出版

二〇〇五年春、わが大学に「デザイン哲学研究所」という小さな研究所が生まれた。多くの読者はその難解でしかつめらしい名前から、一体何をやっている所だろうといぶかしく思うに違いない。字義どおりにいえば、「デザイン」の存在意味や本質（平たくいえばデザインとは何か）について考える研究所ということになる。でもこれはそう簡単にできることではない。そこで私たちは、デザインに関わる多くの人々に「その手をちよっと休めて、今やっていることの意味を考えてみませんか」と呼びかけることから活動を始めた。デザインの意識変革である。

その呼びかけの媒体の一つが『デザインの知』である。昨年創刊号を刊行し本書はその第二弾である。デザイン関係の本というところとビジュアル本が多いなかで、本書のような論考主体の本が果たして読んでもらえるだろうかと危惧していた。しかし幕を開けてみると、読者からの共感のことがばや、本の趣旨を評価する書評など予想外の好意的な反響をいただいた。特に本学図書館の昨年度貸出しランキング1位になったことは驚きであった。学生諸君がああ難しい本を読んでもくれたということが何よりも嬉しいし、励みになった。

本書（第二巻）の内容は創刊号とほぼ同様の構成である。創刊号ではデザインの意味と本質についての抽象的な論考が、全体のトーンを形づくっていた。それに対して本書は一転して、自分が辿ってきた道と、自分の研究

や仕事をおしてデザインの本質を語ろうとする論考が大勢を占めた点が大きく異なる。わたしはデザインの本質を考えるには、デザインを具体的・個別的に見る目と、抽象的・普遍的に考える両方の視点が必要だと思っている。『デザインの知』がそういうさまざまな意見や考えがぶつかり合うフォーラム（広場）であってほしいと願っているが、二冊目でそれが現実のものになりつつあることを歓迎している。本書から先学の思索の旅を追体験して多くを学び、自分のデザイン観を形づくる糧にしてほしい。そして、いつかこの広場で、あなたがデザインについて語ってくれる日の来ることを心待ちにしている。

（デザイン哲学研究所所長 降旗英史）

「見えないところにいけるけど、
見えてるところになかなか行けない」

島袋道浩（二〇〇一）

●神戸アーツビレッジセンター

島袋さんは美術のフィールドで活動していますが、筆や紙を使うなどして作品として作る作家ではありません。

この本には一九九一年から二〇〇一年までの島袋さんの活動の記録がまとめられています。島袋さんの作品はどれも一見よくわからなくてへんでこです。何十もある中からいくつか紹介すると、例えば「贈り物」（一九九二）というもの。島袋さんは京都の岩田山のサルと、エサ以外の方法でコミュニケーションが取れないかと考えました。ガラスのかけらに興味を持つサルがいることを知り、キラキラするものを集め贈り物を持って行ったということが作品です。違うルールを持つもの同士の関係・出会いは何度も島袋さんの作品のテーマになっています。

他には「南半球のクリスマス」（一九九四）

という作品。暖かい季節、電車が通過する海の近くの空き地でサンタクロースの格好をして、電車に乗った南半球出身の人に故郷を思い出してもらおうとしたものです。「南半球」をテーマにしたものも何度も登場します。島袋さん自身の言葉を借りれば「南半球」という文字を心に浮かび上がらせる時、僕の意識は裏返りながら、僕自身の南半球へ飛ぶ。地球をやわらかく立て切りにする感触。

そして「人間性回復のチャンス」（一九九五）。神戸の地震直後に出会った人間の優しき強さ、助け合う姿を目の当たりにして、地震を起こったものとして、ポジティブにとらえたものです。

島袋さんは自分以外の人間や動物・植物をはじめとするいろいろなものごと、それらの関係を考え制作しています。

作品やプロジェクトを實際経験したことはないのですが、この本を読んで想像できることは、島袋さんが世界にアクションを起こしたとき、はた目からすぐ分らなくても実はほんの少し世界がしあわせな方向に進んでいるということ。こういう美術家の在り方もあるのだな、そもそもアートとは何だろう？そんな風に考えさせられます。文章は親しげでとても読みやすいです。なぜかよくタコが登場するのが謎です。

（映像コース副手 大沼洋美）

学生リクエスト紹介

リクエストには理由があります。昨年度のリクエストからほんの一部を紹介します。

◆「古書修復の愉しみ」紙資料の保存修復や、日本の古典籍の修復・製本を学び、西洋の古書修復についても興味をもったため。（美文Sさん）

◆「アフガニスタン流出文化財の調査」壁画の修復について勉強したいため。（美文Nさん）

◆「会田誠 Monument for Nothing」制作意欲を刺激されると思うため。映像コースKさん）

◆「建築家ガウディ全語録」ガウ

ディに関するあらゆる資料が詰まっています。充実した内容。（美文Sさん）

寄贈図書紹介

平成十九年度も沢山の蔵書の寄贈を頂きました。以下に本学の先生方、卒業生からの寄贈図書について紹介いたします。（掲載順不同）

■元倉真琴教授「Urban design」
「Architecture in detail」シリーズ十二冊）
「Mother's House」
「Designing America」
「Yoshio ikahara : atmosphere and autonomy」
ほか洋書多数
■「ハビネス」
「ボザール建築理論講義」
「ラスキンとヴィオレ・ル・デュック」
「Ishimoto Architectural & Engineering Firm, Inc.」
等
■「カルロス・スカルパ」
他（現代建築家ピデオシリーズ十二点）
「Otto Wagner」
「Josef Hoffmann」
等ビデオ資料
■山中良子教授「現代日本の衣匠（Art box in Japan）」
■温井亨准教授「青い目の人形ものがたり」
「都市建築のかたち（日本建築学会叢書）」
■内藤正敏教授「江戸・王権のコスモロジー（内藤正敏・民俗の発見）」
「ヤング・ポトフォリオ」
「古いー老いをめぐる美とカタチ（福島県立博物館企画展図録）」
■入間田宣夫教授「中世武家系図の史料論」
「平泉・衣川と京・福原」
「石井進著作集」
「牧の考古学」
他
■久保田力教授「A Sanskrit primer」
■坂東慶一准教授「Studio shokudo 1997-1998」
「ペコペコペコ」
■六車由美准教授「狩猟と供犠の文化誌（叢書・文化学の越境）」
■田口洋美教授「Understanding Asian Bears to secure their future」
■水上修准教授「絵巻物」
「肖像画」
「飲食器」
「甲冑」
「木竹工芸」
「香川の漆工芸」
「キリ・ウルシ」
ほか多数
■小野一隆さん（第一期卒業生）
「村野藤吾選集」
「村野藤吾建築図面集」
「日本の庭」
「三養荘」
■藤村悦洋さん（第一期卒業生）
「悦楽オムニバス」……他
ありがとうございました。

Information

ガレリア・ノルド／スタジオ144／AVルーム

Galerie Nord

● 4/14(月)～4/18(金)

「G-Cup展」

(グラフィック3年／窪田梨絵他)

● 4/21(月)～4/26(土)

「愛することが可能なものたち」

(グラフィック4年
／石澤由紀・遠藤夏海・本沢利奈)

● 5/12(月)～5/17(土)

「生きる証」

(日本画3年／吉田祐子他)

● 5/19(月)～5/24(土)

「Discovery」

(グラフィック3年／鏡春菜他)

● 5/26(月)～5/31(土)

「モンスター★ハウス」

(芸術文化M2年／三浦弘恵他)

● 6/2(月)～6/7(土)

「GUESS展」

(未来デ4年／齊野友美他)

● 6/9(月)～6/14(土)

「お惣菜」

(美術科3年／鈴木尚武他)

● 6/16(月)～6/21(土)

「Kayako Tanaka Exhibition SHOJO-TEN」

(工芸2年／田中可也子)

● 6/23(月)～6/28(土)

「真面目に不マジメ」

(日本画3年／大塚怜美)

● 6/30(月)～7/5(土)

「はじめから見テン」

(日本画3年
／荒木ゆかり・菊池咲)

Studio144

● 4/7(月)～4/12(土)

「写心展」

(歴史遺産3年／川辺菜由他)

● 4/14(月)～4/19(土)

「Plywood ふぁにちゃー展」

(生産デ4年／村上江里子他)

● 4/21(月)～4/26(土)

「えほん展Ⅱ」

(グラフィック3年／佐藤友里衣他)

● 5/1(木)～5/10(土)

「黒彩 クロサイ」

(洋画3年／鈴木菜津美他)

● 5/12(月)～5/24(土)

「Mission 2008」

(プロダクト3年 渥美・柚木)

● 5/26(月)～5/31(土)

「Construct」

(デザイン工学M1年／泊篤志他)

● 6/2(月)～6/7(土)

「はこのそと」

(映像2年／海老原由衣他)

● 6/9(月)～6/14(土)

「映3×2」

(映像3年
／大久保賢治・小玉大介)

● 6/16(月)～6/21(土)

「しちならべ」

(日本画2年／有田真季)

● 6/23(月)～6/28(土)

「体とプロダクト」

(生産デ4年／菅原陽輝他)

● 6/30(月)～7/5(土)

「笑う魚」

(グラフィック3年
／笹垣弥子・有路通子)

AVルーム

● 4/17(木)17:30～

ドキュメンタリーフィルム

上映会-49

「杣人物語」

● 5/15(木)17:30～

ドキュメンタリーフィルム

上映会-50

「頑固な夢」

平成20年度後期の展示施設の利用については、7月に公募する予定です。詳細はネットバスに公開します。新入生の諸君も積極的に応募してください。

Topics

図書館に必要な文献が見つからなかったとき「文献の取り寄せ」が出来ます。

●取り寄せられる文献は？

複写(コピー)、または現物借用での取り寄せになります。

●文献取り寄せにかかる所要日数は？

文献は郵便で送られてきます。所蔵機関の所在地に影響されますが、休日を除いて2日～1週間ほどです。

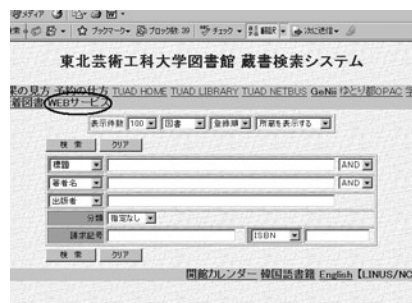
●経費の負担は？

送料とコピー料金等を実費負担いただきます。複写の場合、コピー1枚が平均40円、送料はコピーの枚数に応じ変わります。現物借用の場合は、往復の書留料金1冊1,200円～1,400円程度です。

●申し込み方法は？

カウンターで配布する申し込み用紙に記入するほか、以下の手順でウェブでの申し込みも可能です。

1. WEBサービスの文字をクリックします。



2. 利用者番号※1、パスワード※2を半角の英数字で入力します。

※1 利用者番号 学生証裏面のバーコードの番号です。(平成18年度の入学生はガイダンスの際に配布したWEBサービス利用者番号です。)

※2 パスワード 初期設定は西暦の生年月日です。(例 平成元年5月3日生まれなら19890503) パスワードは変更できます。



3. 文献取り寄せは「ILL」を選択。



掲示板

●図書館二〇〇八年年間予定

図書館では、徳山詳直理事長が繰り返し発しているメッセージを元にテーマを決めて、そのテーマにそった本の紹介展示やドキュメンタリー映画の上映会を行っています。

徳山理事長のメッセージをお伝えしなすう。

「世界では、紛争と殺戮が繰り返されている。幸せを追い求めながら、憎しみ合い殺しあう人間の愚かさ。そして私たちの日常においても、毎日のように子ども達が傷つけられる痛ましい事件が起きている。現代文明の姿を、この日本や世界の現状を、学生諸君の純粋な目でしっかりと見つめてほしい。何が本当で何が嘘か。人を愛するとはどういうことか。いかに生きるべきか…。」

二〇〇八年度の年間テーマは、昨年に引き続き「いのちを考える」です。

この年間テーマを元に、さらに二ヶ月ごとのテーマをつくり、内容を変えて実施します。

■図書企画展示の部

●四・五月のテーマは、「人として生きてゆくことを考える」です。

メイン展示は、「青春の本一〇〇選」。哲学、心理学、社会教育学、文学、芸術等の図書を中心に、命を重さや生きることについて考える本や、学生時代だからこそ読んで欲しい本を一〇〇冊以上紹介し貸し出します。

展示二は、「スタートアップ大学生活」。大学で学ぶとはどういうことか、自己発見、健康、将来について考える本など、大学生入門本を五十冊以上紹介し貸し出します。

展示三は、「愛するということ」。愛するこ

との幸せ、苦しみ、悲しみ、生きることの素晴らしさなどについて考える本を五十冊以上紹介し貸し出します。

●六・七月のテーマは、「地球のいのちを考える」です。

地球環境問題を知り、我々のなすべきことなどについて考える本を一〇〇冊以上展示し貸し出します。

●十・十一月のテーマは、「戦争と平和と芸術を考える」です。

戦争と平和と人類の未来について、そして芸術が果たす役割などについて考える本を一〇〇冊以上展示し貸し出します。

●十二・二月のテーマは、「働くことと生きてゆくことを考える」です。

働くことについて、哲学、芸術、社会学、心理学等の面からの切り口で考える本や、就職活動にすぐに役立つ本、ライフプランニングの本など一〇〇冊以上を紹介し貸し出します。

■ドキュメンタリー上映会の部

NPO法人山形国際ドキュメンタリー映画祭と共催で、年間テーマに基づき「生きてゆくこと」「地球環境」「戦争」などに関する作品を月に一回ずつ上映します。

四・五月の予定は次のとおりです。

四月十七日(木) 午後五時三十分から

「杣人物語」The Weald

河瀬直美監督／日本／一九九七／カラー／七十三分

カンヌ映画祭でカメラドール賞を受賞した『萌の朱雀』の舞台でもあった奈良県西吉野村大字平雄に暮らす人々の人生を描く。

五月十五日(木) 午後五時三十分から

「頑固な夢」Stubborn Dreams

監督・ソボリッチ・ベラ

ハンガリー／一九八九／カラー／九十三分

ハンガリーのオーストリア国境近くの村ラーバジャルマートを舞台に、そこで繰り返し広げられる年一回の村芝居への村民の関わりや想いを描いた作品。一九九一年山形国際ドキュメンタリー映画祭ロバート&フランシス・フラハティ賞(大賞) 受賞作品。

六・七月は、地球環境をテーマに次の作品を上映します。

六月十九日(木) 午後五時三十分から

「死のトライアングル」Triangle of Death

監督・イエジー・スワトコフスキ

スウェーデン／一九九〇／カラー／五十七分
ポーランドの南西部にある鉱工業地帯の公害の影響を描く。大胆にナレーションを省略して、ひたすら映像によって公害に打ち倒された世界を凝視していく。

七月十七日(木) 午後五時三十分から

「極北のナヌーク」Nanook of the North

監督・ロバート・フラハティ

アメリカ／一九二二／モノクロ／五十分
イヌイット一家の一年にわたる生活を描いたドキュメンタリー史上に残る傑作。

後期の上映会の日程と内容は、次号以降のライブラリー通信やネットバスの「お知らせ」等でご案内します。

■「掘り出し本の市」の開催

図書館に寄贈された資料のうち、重複などの理由で所蔵予定のない本を、学生対象に無料で配布する大好評企画「掘り出し本の市」は、今年度は一〇月に開催予定です。

そこで教職員のみならず、学生にプレゼントしたい本を広く募集しています。詳しくは図書館スタッフまでお願いします。

司書るうむ

静かな湖面に投げ入れられた小石のように、心の中にいくつもの水紋を広げる言葉がある。

「あなたがいった、『美しい』とはどういうことなのか。」

この言葉は、今月号第一面のエッセイを書いてくださった美術科の若月公平教授が、サンピエトロ大聖堂内部を描いた学生に宛てた書簡の中の一節である。

若月先生は、学生に静かに問い続ける。「美しく」感じたのか、若しくはそう見えたのか。ただの鑑賞者でなくそれを基に作品制作する場合の「美しい」の意味とは何か。歴史、宗教、人々が生きた膨大な時間をどう解釈し捉えるのか。

さらに、若月先生は語りかけるのだ。視覚的なものを排除した五感で観えてくるものは何か。視覚的「美しさ」の裏に潜む見えない「モノ」を如何に観るか…。それら全ては、学生への問いであると同時に、常に自らに課している問いかけなのだろう。

東北芸術工科大学美術館大学構想室が編集した「私の語るアートとデザイン」の中の「個の在処」という文章の中に、この書簡が掲載されている。この本は、本学の教員四十八名が、教育者としてまた表現者としての姿勢をあらわしている武士道のような本である。それぞれの語り口による芸術やデザインに対する熱い思いに心を動かされない人はいないだろう。本学図書館の貸し出しランキングの常に上位に位置し、卒業までにぜひ読んで欲しい本のなかの一冊である。

本学図書館には約十二万冊の資料があるが、その中に、あなたの心を揺さぶり、人生を共に歩むことのできる本が必ず存在するはずである。図書館は、書物と出会える場所であり、「人」と出会える場所でもあるのだ。

(図書館 谷川佳代子)